

一括りにされる貞山運河と木曳堀—余話—

『貞山・北上・東名運河事典』事務局

(野蒜築港ファンクラブ会員)

叙述が繰り返されるうちに、曖昧だったものが事実化されていくように思えるものがあります。その例が、仙台藩祖伊達政宗公と貞山運河のこと。一括りの象徴的なものとして市史などの編纂時にしばしば引用された『仙台事物起源考』の内容をかいつまんで言えば、「太平洋沿岸は波浪が高く、小舟では安全航行が難しいことから、政宗は北上、鳴瀬、七北田、名取、阿武隈の諸河川を結ぶことに着眼し、運河開削を構想した。これによって、御舟入堀、木曳堀、北上運河も東名運河も実現した。」となります。

政宗が、北上川河口から仙台北下への搬送の安全性・効率性などを大いに期待したであろうことは想像するに難くありません。しかしいつしか、「あの政宗のことだから諸運河開削を構想しただろう」、「構想したに違いない」、「構想した」と変化していく。歴史的背景を踏まえないこうした誤った情報発信は、学習を通じた地域アイデンティの確立はもとより、観光資源としての活用の面においても、大いに反省すべきと私には思えてなりません。

ところで、貞山運河のうち木曳堀（木引堀）は、貞山公（仙台藩祖伊達政宗）の命により、川村孫兵衛重吉が開削したとこれまで一般的に言われてきました。とはいえ、これには諸説あります。（貞山運河を語るときには、この諸説あることを含めてきちんと行うべき。）

■ 貞山運河（木曳堀＝木引堀）開削をめぐる主な諸説

| | 慶長2年説 (1597～1601) | 慶長6年説 (1601～) | 慶長16年以降説 (1611以降) | 慶長年間後半～元和年間説 (1615～1624) | 寛文年間説 (1661～) |
|---------------|--|----------------------------------|--|---|--|
| 開削目的 | ①仙台北城築城と城下町整備のための木材輸送 ②低地排水対策 | ①仙台北城築城と城下町整備のための木材輸送 ②低地排水対策 | ①慶長大津波後の浸水地帯の解消（排水対策） ②木材輸送 | ①阿武隈川流域と城下町をつなぐ物資輸送（木材類が多いことから木曳堀か） ②名取平野の排水 | ①木材輸送 ②低地排水対策（墾田） |
| 提唱者等 (敬称略) | 只野淳『北上川の変遷』 宮城県史八 遠藤剛人『貞山・北上運河沿革考』 | | 佐藤昭典『慶長大津波と運河仙台北岸、貞山運河のうち木曳堀物語—その謎多き運河史』 | 仙台市史『通史編3 近世1』 | 伊達邦宗『伊達家史叢談 九』 菊地勝之助『仙台事物起源考』 佐々久『土木概説』宮城県史八 |

※木曳堀は、伊達邦宗『伊達家史叢談 九』の中では「キビキ堀」とされ、仙台市史では「こびき堀」と表記されている。

そこで、●岩出山から仙台への居城移転のころは政情が極めて不安定で、運河（堀）開削といった大工事を行える情勢でなかったと推察されること ●堀（運河）近接地での岩沼市による発掘調査によれば、慶長大津波前の墾田が確認できていないこと ●仙台藩 15代伊達邦宗公による 16年にも及ぶ調査・蒐集・分析の成果 ●正保2年（1645年）仙台藩が製作した『奥州仙台藩領国絵図』に阿武隈川と鳥の海を結ぶ水路に加え、阿武隈川・名取川間に内川の名称で水路が記されていることなどを踏まえ、自分なりに各説の内容を概観し、整理してみました。その結果、次のような解釈に至りました。

- 木曳堀は、慶長大津波（1611年）以降～正保2年（1645年）までに、伊達政宗の命を受けた初代川村孫兵衛重吉によって開削。

※ なお、川村孫兵衛重吉による北上川改修が元和 2～寛永 3 年であることを照らすと、この大工事と同時とは考えにくいことから、木曳堀開削は寛永 3 年以降とするのが適切と考える。

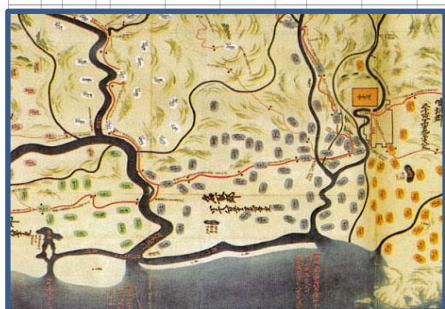
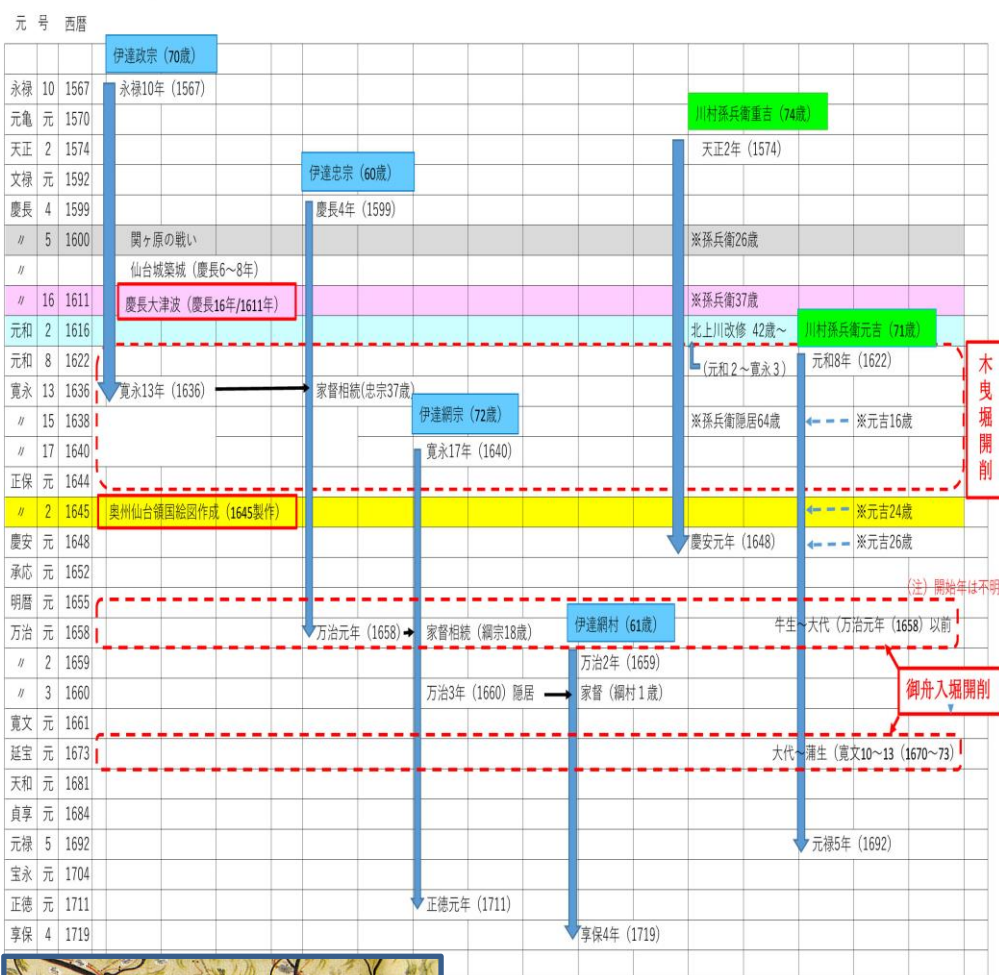
- その後、堀の改修や周辺の開田事業は、2代藩主忠宗公の治世下でも継続。それは、2代川村孫兵衛（元吉）に引き継がれていった。

これもまた浅学ゆえの先走りと自覚しつつ、皆様から情報をお寄せいただき、さらに充実した内容のものに変えていくことができれば幸いです。

なお、関連資料を含めた詳細は、当運河事典をご覧ください。⇒ [こちら\(クリック\)](#)

※本論の方はA 3の大きさ、その他はA 4の大きさのPDF文書となっています。

仙台藩主と川村孫兵衛の家歴



奥州仙台藩領国絵図
(1645年仙台藩製作)
の一部